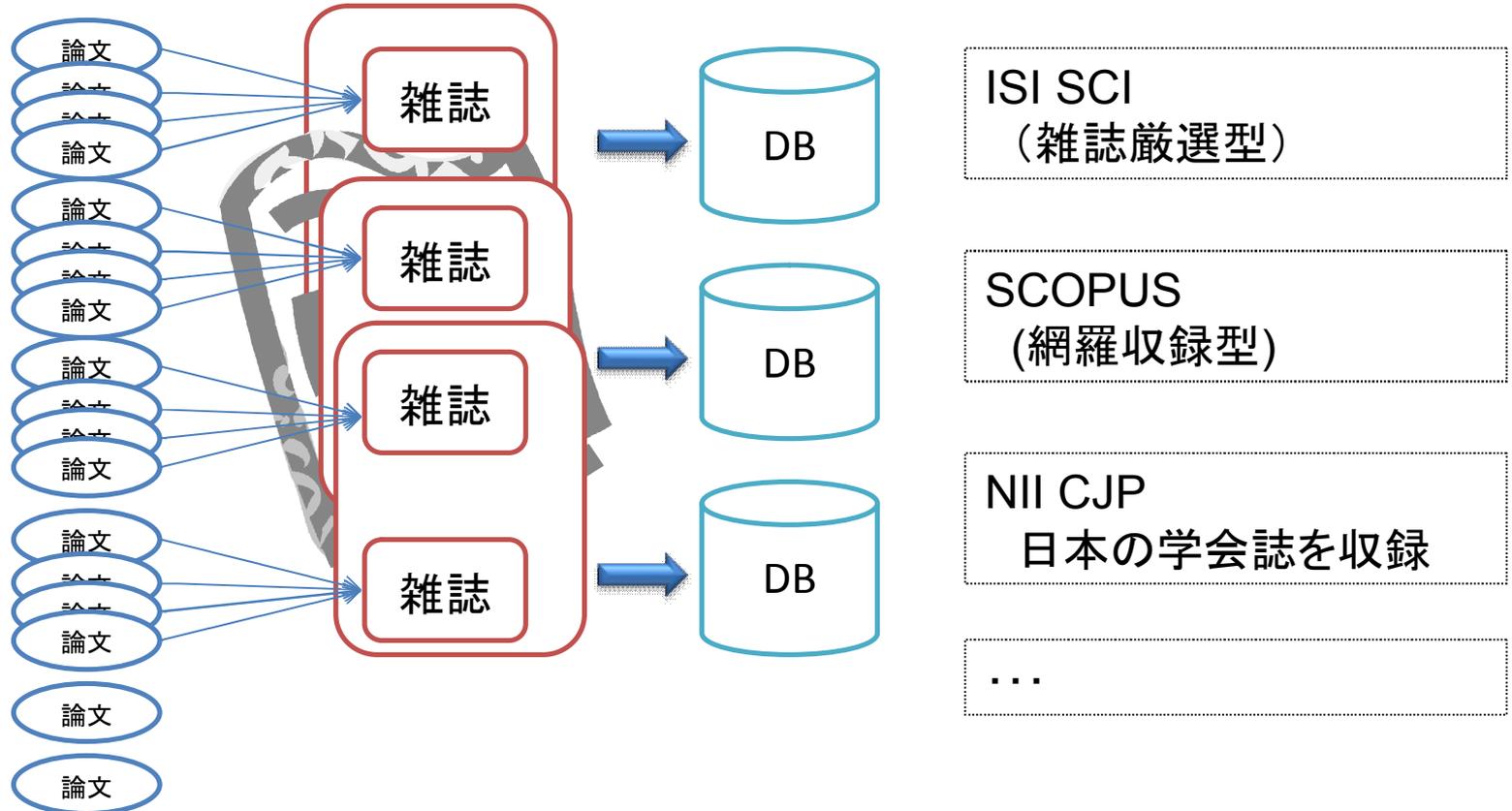


研究評価データ のオーガナイゼーション

国立情報学研究所

孫 媛

研究評価データ



データの属性: 著者, 所属機関, 国, 年, 分野, 雑誌, DB

論文統計に基づく評価指標

- 評価対象
 - 論文／個人／大学・機関／国／雑誌
- 評価指標
 - 論文数, 被引用数を基本指標として, 多様な指標
 - IF, H-index, EigenFactor, Article Influence Score, Crown Indicator
- 各指標の特徴: 固有の限界
 - 評価対象は適切か(たとえば, IFは特定の研究分野における雑誌の影響度を測るために提案された指標であり, 個々の掲載論文の質を保証するものではない)
 - 分野の違いは反映されているか?
 - (2年)引用年数の問題

研究評価に関わるもう一つの限界

- DBへの依存性(収録範囲の問題):
 - 従来, 研究評価の原データは, トムソンISIのDBだけであつたが, 近年, エルゼビア社のScopusなどの競合製品が現れて状況が変化
 - たとえば, 英Times誌の別冊「世界の大学ランキング」は, 論文引用データを2007年からScopusに変更(それまではISIを利用)
 - 各種の評価指標は, 各DB内で計算される
 - 評価指標の改良や新指標の提案も特定のDB中での工夫
- ⇒ 異なるDBに基づいた指標間の比較ができない
- たとえば, 日本応用物理学会刊行の英文誌*Japanese Journal of Applied Physics, Part 2: Letters*の2000年IFは, CJP版では0.59, SCI JCR版では1.16

環境・技術の進展に伴う変化

- 電子ジャーナル・雑誌論文のオープンアクセス(OA)化・機関リポジトリ・研究者自身による論文のウェブ公開など、学術情報を巡る環境の激変
- 現在の評価指標・評価対象を変えてしまう可能性
 - OA化により被引用数がどう影響を受ける?
 - 機関リポジトリなどにより、評価対象を広げられる?⇒ トップジャーナル英文論文のみならず、国内学会誌論文、さらに雑誌に掲載されない論文・調査など、研究者の幅広い研究活動を評価対象とすることが可能になる
- 新しい評価指標の可能性
 - ダウンロード数
 - リンク数

研究評価は、これからどこへ向かう？

- 個々のDBの収録範囲に依存しない論文評価尺度を作ることは可能か？
 - 雑誌IFの等化
 - 雑誌(論文)の分野分類の対応づけ(論文のキーワードによる)
- 研究評価の対象・指標の意味の見直し
 - DBに収録されていない ≠ 価値がない
⇒ 多次元・多指標評価を積極的に行うべき
 - 雑誌の電子化および「名寄せ」処理技術の進展とともに、そうした評価が可能になるのではないか